

< 翻訳 >

第三代シャフツベリ伯爵『熱狂に関する書簡』和訳と解説(上) ——1708年版の始めから38頁まで——

菅谷 基

本稿は、第三代シャフツベリ伯爵ことアンソニー・アシュリー・クーバー (Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury, 1671-1713) の著作『熱狂に関する書簡 (A Letter concerning Enthusiasm. 1708年)』の解説と和訳である⁽¹⁾。この著作は、当時ロンドンで活動していた「フランス預言派 (French Prophets)」に対して出版された数多くの文書の一つであり、後にシャフツベリの著述活動の集成である『人間、作法、意見、時代の諸特徴 (Characteristicks of Men, Manners, Opinions, Times. 1711年)』に収録される「第一論文 (Treatise I)」でもある⁽²⁾。本稿を含む二稿では、『熱狂書簡』の解説と和訳を通してシャフツベリの思想を紹介することを目的としているが、その前半となる本稿では、特に、『熱狂書簡』をフランスとイングランドの宗教情勢やフランス預言派の活動といった背景の中に位置付けることで、『熱狂書簡』に表現された思想の理解を深めることを目指している。そこで本稿の構成は、1. シャフツベリおよび『熱狂書簡』についての紹介、2. フランス預言派に先立つフランスとイングランドの宗教政策の情勢の整理、3. カミザール戦争からフランス預言派の台頭までの流れの整理、4. 和訳にあたっての諸注意と凡例、5. 和訳本文、という順序になっている。

解説

1. シャフツベリと『熱狂書簡』について

『熱狂書簡』の著者シャフツベリは政治家であり、著述家であった。ここでは

大陸旅行（グランド・ツアー）を終えてから『熱狂書簡』を出版するまでの彼の活動を紹介していこう⁽³⁾。1689年にイングランドへ帰国したシャフツベリは、議員立候補の勧めを一旦断り、5年間の学生生活に入った。この間に彼は古今の学芸を研究する傍ら、祖父の初代伯爵（Anthony Ashley Cooper, 1st Earl of Shaftesbury, 1621-1683）や自らの教育監督者ジョン・ロック（John Locke, 1632-1704）の人脈をつたって国内外の知識人と交流した。1695年、政治家ジョン・トレンチャード卿（Sir John Trenchard, 1649-1695）の死去をきっかけに、シャフツベリは議員立候補を決め、アンソニー・アシュリー・クーパーとして庶民院に議席を持つことになった。彼の庶民院での活動の例としては、1696年の反逆法案の通過への貢献が挙げられる⁽⁴⁾。一方、シャフツベリは1698年にベンジャミン・ウィチコート（Benjamin Whichcote, 1609-1683）の説教集を出版し、その序文で当時の道徳論と宗教論の思潮を論評している⁽⁵⁾。同年に庶民院を離れたシャフツベリは、1699年までオランダやドーセット州の実家で過ごしていたが、父の死去に伴いその爵位を継ぐと、第三代シャフツベリ伯爵として貴族院に議席を持った。彼の貴族院での活動の例としては、「イングランド人」の超党派的な団結を訴えた『国家のパラドクス（*Paradoxes of State*. 1702年）』の出版がある⁽⁶⁾。そして、1702年に貴族院を離れたシャフツベリは、時事政局への関心を保ちながら、道徳と宗教に関する著述活動の準備を始める。すると、1706年にフランス預言派が登場し、やがてその活動に対しては90に上る文書が発表された⁽⁷⁾。そして、1708年にはこれに加わる形で、シャフツベリの本格的な著述活動の始まりとなる『熱狂書簡』が出版されたのである。

この『熱狂書簡』は、シャフツベリが出版した諸著作の中で最も大きな反響を呼んだ一冊であり、フランス預言派に反応した同時代人の文書としても興味深い資料である⁽⁸⁾。この著作の中心的な問いは「熱狂とはどのような現象であり、人間はこの現象とどう関わっていくべきなのか」というものである。当時の「熱狂」という言葉遣いには靈感の主張に関わる宗教的な含意があったのだが、ここではむしろ「想像による並外れた感情の高揚」という意味合いの方が強く表れて

いる⁽⁹⁾。また、熱狂が考察されるにあたっては、熱狂に捕われた当人の他にも、熱狂を利用する詐欺師、迫害や殉教の精神を抱く者、他人から熱狂が感染した者など、様々な主体に注意が向けられている。そして、この熱狂という現象への対処法としては、自由による牽制という考えが一貫して支持されている。この対処法は次のように論じられる。熱狂する自由を認めると同時に、これを牽制するように熱狂を吟味する自由、そしてその極致として熱狂を笑う自由を保証することは、熱狂に対する効果的な試金石である。こうした吟味の自由が十分に信頼されるためには、その対象に例外があってはならないのだから、いかなる権威も吟味され得ること、そして笑われ得ることが原則として要求される。一方で、この自由そのものも吟味されること、つまり、笑いが笑いそのものにも向けられることから、自由の品格もまた変化成長していくということが期待される。こうした自由と吟味の環境は、熱狂に由来する暴動を予防すると同時に、吟味に耐え抜く優れた熱狂の活躍の場を残すだろう。さて、こうした『熱狂書簡』の問題設定、視点、議論をその背景の中に位置づけながら理解するために、次の節からは、この著作を取り巻いていた宗教情勢と、その枠組みの中で熱狂者とされたフランス預言派の活動について整理していこう。

2. フランスとイングランドにおける宗教体制の変遷

17世紀中葉のフランスには100万人のユグノーが暮らしており、公務や商工業を担いながら、法律の許す範囲で宗教活動と教育活動を行っていた⁽¹⁰⁾。そして、カトリック信仰の覚醒という当時の観点から見れば、このような「寛容 (tolérance)」は、救済から遠ざかる隣人を放置するという「悪への加担⁽¹¹⁾」として解釈され得るものであった⁽¹²⁾。しかし、1661年より親政を始めたルイ14世 (Louis XIV, 1638-1715) はこうした寛容の方針を退け、「自称宗教改革者 (Religion Prétendue Réformée)」をカトリック教会へ連れ戻すための諸政策を実行していった。数多くの立法措置によって、宗教的儀礼や教育活動を始めとするユグノーの生活の諸側面は徐々に締め付けられていき、改宗した信徒に経済的な援助が約束される一

方で、改宗を拒む信徒は公職やギルドから追放されていった⁽¹³⁾。そして、1681年からは竜騎兵による暴力的な強制改宗である「ドラゴナード (dragonnades)」が本格的に実施された。「恫喝せよ、損害を与えよ、改宗を強制せよ」という命令を与えられた竜騎兵の一団は、派遣された地方で恐慌を引き起こし、多数のユグノーを改宗させた⁽¹⁴⁾。こうした財産の破壊と拷問による強制改宗は、まさに「強いて入らしめよ (contrains-les d'entrer)」という言葉の苛烈な解釈であった⁽¹⁵⁾。そして、より大規模なドラゴナードによって10万人規模の改宗が達成された1685年、ルイ十四世はフォンテーヌブロー勅令を発し、ユグノーの権利を一層することを宣言した⁽¹⁶⁾。その一方で、一連の改宗政策の展開に対して数多くのユグノーが国外への逃亡を試みており、これを防ぐための罰則規定や監視体制の強化にも関わらず、フランスからは結果的におよそ20万人のユグノーが脱出し、イングランドはアイルランドと共にそのうち4万人から5万人を受け入れたと推定されている⁽¹⁷⁾。

フランスの宗教情勢がこうした変化を起こす一方で、イングランドの宗教情勢も、国教会、カトリック、非国教徒プロテスタントの緊張関係の上に展開していった。1661年に王政と共に国教会が復活すると、チャールズ二世 (Charles II, 1630-1685) はこれに先立って発していたブレダ宣言に従って国教会体制の穏健化を目指したが、これは議会に承認されなかった⁽¹⁸⁾。むしろ、1661年の第五王国派の暴動といった背景から、議員たちはチャールズと対立しながら、非国教徒を自治体の役職と聖職から追放する自治体法と礼拝統一法、そしてその宗教集会を制限する集会法と五マイル法を制定した⁽¹⁹⁾。チャールズは1670年に議会が時限立法であった集会法を更新しようとしたことを受け、非国教徒に対する刑罰の停止を命じる信仰自由宣言を発したが、1673年の議会はこれを撤回させた上、公務と軍務を国教徒のみで独占する審査法を制定した⁽²⁰⁾。この頃より、国王や宮廷派 (Court Party) と対立するように在野派 (Country Party) が組織され、その中心人物である初代シャフツベリ伯爵は、1678年の「法王教陰謀事件 (Popish Plot)」を背景としてカトリック教徒であり王位継承候補者であるヨー

ク公（James II, Duke of York, 1633-1701）の排除を狙っていた⁽²¹⁾。そして1679年、総選挙によって宮廷派に勝利した初代伯爵は「法王教と隷従は二人の姉妹の如く手と手を取り合いながらやってくる⁽²²⁾」と論じた上で、ヨーク公を王位継承枠から除外する排斥法案を通すための請願活動を組織し、別の王位継承候補の擁立にも努めた⁽²³⁾。これに対しチャールズは、議会を閉じて法案の審議を停滞させながら、法案請願者（Petitioners）による民衆扇動の不安を利用して初代伯爵に大逆罪容疑をかけ、ヨーク公の王位継承の障害を政界から追放することに成功した⁽²⁴⁾。こうして1685年にジェームズ二世として即位したヨーク公は、1687年にカトリック王による寛容政策として信仰自由宣言を発し、その中で非国教徒の礼拝の自由、非国教徒への刑罰の適用停止、審査法の停止を宣言し、さらに1688年に発した第二次宣言では全教会における宣言内容の朗読を命じた⁽²⁵⁾。そして、同年、朗読命令の撤回を請願した主教の投獄やジェームズの妃の男子出産に危惧を覚えた議員や主教の招請を受け、メアリ二世（Mary II, 1662-1694）とウィリアム三世（William III, 1650-1702）がイングランドに上陸すると、ジェームズの亡命をもって名誉革命が到来するのである⁽²⁶⁾。

1680年代は、フランスではカトリック改宗政策が頂点に達したが、イングランドではカトリックに対抗する国教徒と非国教徒プロテスタントの協同という考えが台頭していた。この頃から、非国教徒プロテスタントの礼拝を合法化する「寛容（Tolerance あるいは Indulgence）」と、国教会の規定を緩和することで非国教徒プロテスタントをこれに取り込む「包括（Comprehension）」という二つの政策が審議されており、1689年には包括法案を残して寛容法案が成立することになった⁽²⁷⁾。他にも、ロンドン主教ヘンリー・コンプトン（Henry Compton, 1632-1713）のようにヨーロッパ各地のプロテスタントと接触した国教徒も存在したし、1699年に組織された「キリスト教知識普及会（Society for Promoting Christian Knowledge）」もヨーロッパ規模のプロテスタント・ネットワークの形成を進めていた⁽²⁸⁾。名誉革命によって国王となったウィリアムや、これを継いだアン女王（Anne, 1665-1714）も、国内外のプロテスタントの支援を通してこ

うしたプロテスタント協同を支えた君主であり、それぞれが戦ったアウクスブルク同盟戦争（1689-1697年）とスペイン継承戦争（1702-1713年）は、ジェームズ父子によるカトリック国王体制が阻止された戦争でもあった⁽²⁹⁾。そして、イングランドに亡命したユグノー信徒も、プロテスタント同士の協同を通してカトリックに対抗していた国教会体制の中で、これにある程度順応しながら難民として経済援助を受け、自分たちの宗教活動を許可されていたのである⁽³⁰⁾。しかし、1706年に出現したフランス預言派は、これとは対照的に、前世紀のセクトや預言者の伝統に連なる熱狂的活動者であり、プロテスタント協同と寛容法体制の限界に触れる存在だったのである。

3. カミザール戦争と「フランス預言派」

フォンテーヌブロー体制下のフランスに最初の預言者が現れたのは、1688年のことである。預言を行った十六歳の羊飼いは7月に投獄されたが、それから半年の間にドーフィネやこれに隣接するラングドックの住民から多数の「靈感者 (inspirés)」が出現した。この人々は1689年の春に一斉摘発を受け、処刑されるか修道院や収容所に送られた。これを免れた預言者はセヴェンヌの山岳地帯やその近隣のヴィヴァレに散り、預言活動はその後10年近く沈黙することになる⁽³¹⁾。しかし、1700年11月にヴィヴァレで再び複数の預言者が現れると、この預言活動はおよそ一年かけて数百人規模に膨れ上がり、やがて奇跡も証言されるようになった。1701年11月、フランス当局が約400人の「狂信者 (fanatique)」を監獄やガレー船に送ると、これを逃れた残りの預言者やその支持者たちはセヴェンヌで後に「カミザール (Camisards)」と呼ばれる集団を形成した。この集団は、初めセヴェンヌに身を潜めていたが、獄中のユグノーの救出が複数の預言を通して命じられると、スペイン継承戦争が勃発して間もない1702年7月24日、監獄を襲撃してカトリック聖職者を殺害し、カミザール戦争（あるいはセヴェンヌ戦争）を始めたのである⁽³²⁾。カミザールは勢力を増やししながら、靈感者の預言やジャン・カヴァリエ (Jean Cavalier, 1681-1740) の采配に従って激しい戦闘を

行った。しかし、1704年にヴィラル元帥（Claude Louis-Hector de Villars, 1653-1734）が赴任し降伏を勧告すると、故郷の壊滅や預言の沈黙を受けて、多くの者がその勧告に従うこととなった。カミザール戦争はこの年から徐々に終息していくが、預言者エリ・マリオン（Elie Marion, 1678-1712）のように降伏を拒否して抵抗を訴え続ける者もいた⁽³³⁾。

マリオンが2人の同志を連れてロンドンに現われ、預言活動を始めたのは1706年のことである。ロンドンのフランス人教会には多数の亡命ユグノーが集まっていたが、マリオンたちはロンドンの亡命聖職者がフランスに残った自分たちを置き去りにしたと考え、これに合流しなかった。一方、フランス人教会側も、プロテスタント難民として国教会と協力しながら信徒の生活を安定させなくてはならない立場にあったため、預言者を名乗るゲリラ活動家との結びつきが不利に働かないように、マリオンたちから距離を置いた⁽³⁴⁾。マリオンはが1706年のうちに獲得した支持者は僅かであったが、1707年の春には、マリオンはイングランド人の新たな支持者ジョン・レイシー（John Lacy, bap. 1664, d. 1730）と協力して、『セヴェンヌの聖戦場（*Le Théâtre sacré des Cévennes*）』やその英訳の『荒野の叫び（*A Cry from the Desert*）』、そして『預言者の警告（仏 *Avertissements Prophétiques*, 英 *Prophetical Warnings*）』を出版していった。この頃よりマリオンたちの集団は少しずつ支持者を増やし、「フランス預言派（French Prophets）」として認知されていった⁽³⁵⁾。同年7月にはフランス預言派の活動に関する裁判が行われることになり、そこでマリオンたちの活動は市民を混乱させる偽の預言活動と判断された。しかし、出版活動に対する有罪判決にも関わらず、フランス預言派は依然活発であり、さらに病人の治癒などの奇跡が証言されるようになった⁽³⁶⁾。同年11月には、こうして支持者と反対者を増やしていくフランス預言派に対して2度目の裁判が開かれることとなり、そこでエリ・マリオンはその支持者と共に晒し台の刑と罰金を課されることになった⁽³⁷⁾。晒し台の刑は1707年12月に実行されたが、その3週間後にトマス・エメ（Thomas Emes, d. 1707）という人物が病死すると、今度はジョン・レイシーのある預言がフランス預言派内外の関心を集める

ようになった。この預言の内容は、エメが病気から回復するか病死から復活することによって神の栄光が示されるというものであり、やがてエメの復活には1708年5月25日というはっきりとした日時が与えられた⁽³⁸⁾。この日には多数のロンドン市民が預言の真偽を確かめるためにエメの墓所に集まったが、エメは蘇らなかった。しかし、レイシーはエメの復活を妨げた共同体の雰囲気を平然と非難したのであり、なお勢いの止まらないフランス預言派はこの年のうちに400人を超える集団になるのである⁽³⁹⁾。

『熱狂書簡』は少なくとも1707年9月頃より私的に回覧されており、それが出版されたのはフランス預言派に対する2度目の裁判やエメの復活騒ぎが過ぎた1708年の夏のことである。この『熱狂書簡』でもフランス預言派が取り上げられているのだが、そこではこの集団の存在が、同時代の熱狂の実例としてだけでなく、イングランドにとっての試練としても位置付けられている。『熱狂書簡』のフランス預言派に対する姿勢は次のようなものである。「私たちイングランド人 (We English Men)」は古代より続く様々な寛容と迫害の事例を知っており、現にカトリック国家によるプロテスタント迫害は今でも行われている。イングランド人が残虐なネロであるのか、寛容なアテナイ人であるのかは、カトリック国家の迫害を逃れてきたフランス預言派なる熱狂者に対する態度によって決まるだろう。このフランス預言派は殉教を叫び刀剣を求めるかもしれないが、最高の機知の時代の国民として、私たちは笑いをもってこれを迎えよう。現にかつてプロテスタント教徒が迫害され処刑されたスミスフィールドも、今では祭りで賑わい、フランス預言派を茶化す人形劇が平和に行われているではないか。以上のような『熱狂書簡』の議論によれば、フランス預言派の熱狂が自由による牽制によって適切に対処されるのみならず、これを通してイングランドが自由と批判の精神を備えていることが証されるのである。

『熱狂書簡』がフランス預言派をこのような仕方で取り上げた当時、イングランドでは審査法を始めとする法的差別を残しながらも、寛容法を始めとするプロテスタント協同の体制もいくらか実現していた。当時はスペイン継承戦争の最中

であり、ジェームズとその子息を支持するフランスや国内のジャコバイトとの対立は、時として国教会を中心とするプロテスタント体制とカトリック体制の対立を連想させた。『熱狂書簡』においても、私立教会と共存する国立教会という形態が支持されている一方で、自由を排する慈愛の構造や欺瞞を隠蔽する形式主義に対する批判が展開されており、これはそれぞれ国教会体制の支持とフランス・カトリックに対する批判に重なる。しかし、吟味や笑いの自由という『熱狂書簡』の原理から考えると、カトリックの信仰が批判無しに拒絶されることも、国教会の信仰が試されることなく権威を持つことも共に筋が通らないことになる。このことから、『熱狂書簡』は国教会が備えている国立教会という形式を支持しながらも、その信仰内容そのものは自由と機知の発展の中で批判的に吟味され続けるべきであるという立場を取っていることがわかる。すなわち、『熱狂書簡』の関心は、内戦後の秩序の確立やカトリックへの対抗として目指されてきた国教会体制そのものの強化ではなく、むしろ真理と救済を可能にする自由とそれを維持する体制の擁護に向けられていたのである。そして、『熱狂書簡』がフランス・カトリックを批判し、国教会とプロテスタント諸派の協同を支持する立場に置かれるのは、あくまでこうした関心の間接的な結果なのである。

4. 和訳についての諸注意と凡例

『熱狂書簡』の翻訳の底本の候補となる版は1708年版、1711年版、1714年版、1732年版の四つである。1708年版は一冊の独立した著作であり、エピグラフや挿絵は無く、本文の構成単位は段落のみであり、著者の名と書簡の宛て名が伏せられている。1711年版は『諸特徴』初版に収録されており、エピグラフや書簡執筆の日付が加えられた他に、本文の校正と段落の細分化がなされ、新たに節という構成単位が設けられている。この版の『諸特徴』の序文には著者名を推測させる「A.A.C. (アンソニー・アシュリー・クーパー)」を含む文字列が記されているが、これは著者名が明らかにされたとは言い難いところだろう。1714年版は『諸特徴』第二版に収録されており、作品の内容を反映した挿絵が冒頭に追加

され、表紙においてははっきりと著者名が示されている。1732年版は『諸特徴』第五版に収録されており、書簡の宛て名がサマーズ卿 (John Somers, Baron Somers, 1651-1716) であることが明らかにされている。ちなみに近年の『熱狂書簡』の研究においては、諸版の具体的な異同が丁寧に整理されたりチャード・B・ウォルフ (Richard B. Wolf) の校訂版が標準的に用いられている。今回は、「フランス預言派」の活動や聖バーソロミュー市といった当時の出来事との近さと、これが独立した著作として大きな反響を呼んだことを重視して、1708年版を底本に選んだ。もちろん、これは他の版の使用を妨げる判断ではない。今回の訳出範囲は1708年版 (全84頁) のうち38頁までである。本文中のイタリックはブロック引用の箇所を除き傍点で表記している。訳注では内容上の解説事項の他、必要に応じて訳語選択の理由をオックスフォード英語辞典 (OED) の記事情報と共に示している。また、古典古代に関わる固有名詞は英語の発音ではなく西洋古典学の慣例に合わせるようにした (例:「ミューズ (Muse)」ではなく「ムーサ」)。そして、参考になるように、厳密にはないが1708年版の各頁の始まりの位置を本文中に「頁数」という形で示している。

注

- (1) [The 3rd Earl of Shaftesbury], *A Letter concerning Enthusiasm to My Lord* **** (London, 1708). 本稿では「シャフツベリ」は「第三代シャフツベリ伯爵」を、「『熱狂書簡』」は「『熱狂に関する書簡』」を指すものとする。初代シャフツベリ伯爵を「シャフツベリ」と表記することはしない。また、本稿の年号の表記は全て新暦に従っている。
- (2) [The 3rd Earl of Shaftesbury], *Characteristicks of Men, Manners, Opinions, Times* (London, 1711). 本稿では「『諸特徴』」は「『人間、作法、意見、時代の諸特徴』」を指すものとする。「フランス預言派 (French Prophets)」という訳語は、この名称がフランス人預言者とこれに合流したイングランド人をまとめて指すものであったことを重視して選択した。
Hillel Schwartz, *The French Prophets: the History of a Millenarian group in eighteenth-century England* (New Haven & London, 2006), pp. 80, 86-87.
- (3) シャフツベリの生涯の紹介は、基本的に以下の文献に則っている。
Robert Voitle, *The third Earl of Shaftesbury, 1671-1713* (Baton Rouge, 1984).
Lawrence E. Klein, 'Cooper, Anthony Ashley, Third Earl of Shaftesbury (1671-1713),'

Oxford Dictionary of National Biography, Oxford University Press, 2004; online edition, Jan 2008 [<http://www.oxforddnb.com/view/article/6209>, accessed 30 Sept. 2015].

- (4) これは反逆容疑者の裁判権を保証する法案である。
- (5) ウィチコートの説教集およびその序文については以下を参照せよ。
Benjamin Whichcote, *Select Sermons of Dr. Whichcot* (London, 1698).
- (6) The 3rd Earl of Shaftesbury, *Paradoxes of State. Relating to the Present Juncture of Affairs in England and the rest of Europe* (London, 1702).
- (7) Hillel Schwartz, *Knaves, Fools, Madmen, and that Subtile Effluviom: A Study of the Opposition to the French Prophets in England, 1706-1710* (Gainesville, 1978), p. 40.
- (8) ウォルフはシャフツベリの『熱狂書簡』の反響が他の諸著作のそれより大きいと評価している。また、ノックスは『熱狂書簡』をフランス預言派の活動がもたらした諸作品の中で唯一重要なものとしている。
Richard B. Wolf, "The Publication of Shaftesbury's Letter concerning Enthusiasm," *Studies in Bibliography*, Vol. 32 (1979), p. 240. Richard B. Wolf (ed.), *An Old-Spelling, Critical edition of Shaftesbury's Letter concerning Enthusiasm and Sensus Communis: An Essay on the Freedom of Wit and Humor* (New York & London, 1988), pp. 5-12. Ronald A. Knox, *Enthusiasm: A Chapter in the History of Religion with special reference to the XVII and XVIII centuries* (New York & Oxford, 1950), p. 368.
- (9) Alan Charles Kors, ed. in chief. *Encyclopedia of the Enlightenment* (Oxford, 2003).
- (10) 木崎喜代治『信仰の運命——フランス・プロテスタントの歴史』（岩波書店、1997年）、10-20頁。David Garrioch, *The Huguenots of Paris and the Coming of Religious Freedom, 1685-1789* (New York, 2014), pp. 24-25.
- (11) 木崎『信仰の運命』、40-41頁。
- (12) 木崎『信仰の運命』、40-41、70-74頁。
- (13) 木崎『信仰の運命』、81-102頁。サミュエル・ムール（著）、佐野泰雄（訳）『危機のユグノー：17世紀フランスのプロテスタント』（教文館、1990年）、261-264、274-286頁。Garrioch, *The Huguenots of Paris*, p. 25-28.
- (14) 木崎『信仰の運命』、109-112頁。ムール『危機のユグノー』、289-292頁。
- (15) ユグノーの思想家ピエール・ベール（Pierre Bayle, 1647-1706）は1686年に出版した『「強いて入らしめよ」というイエス・キリストの言葉に関する哲学的註解』の中で「強いて入らしめよ」という言葉を口実とした「異端者を正道へ立ち返らせる・愛徳に満ちた・ためになる暴力」の実践を批判している。ピエール・ベール（著）、野沢協（訳）『ピエール・ベール著作集 第2巻 寛容論集』（法政大学出版局、1979年）、63頁を参照せよ。
- (16) ムール『危機のユグノー』、334-366頁。木崎『信仰の運命』、120-132頁。
- (17) 木崎『信仰の運命』、132-146頁。Garrioch, *The Huguenots of Paris*, pp. 28-30, 32-33.

- (18) 浜林正夫『イギリス名誉革命史(上)』(未来社、1981年)、23、42-43頁。
- (19) 浜林『イギリス名誉革命史(上)』、54-65頁。
- (20) 浜林『イギリス名誉革命史(上)』、105-118頁。
- (21) 本稿では「初代シャフツベリ伯爵」を「初代伯爵」と表記する。また、法王教徒陰謀事件の内容は、カトリック教徒が信仰を同じくするヨーク公の即位を狙ってチャールズ暗殺を企てたというものである。
- (22) *The Compleat Statesman, demonstrated in the Life, Actions, and Politick of that Great Minister of State, Anthony earl of Shaftesbury* (London, 1683), p. 62.
- (23) 浜林『イギリス名誉革命史(上)』、118-138頁。青柳かおり『イングランド国教会——包括と寛容の時代』(彩流社、2008年)、84-89頁。
- (24) 浜林『イギリス名誉革命史(上)』、138-144頁。今井宏(編)『世界歴史体系 イギリス史2——近世』(山川出版社、1990年)、246-248頁。
- (25) 浜林『イギリス名誉革命史(上)』、156-160、172-174頁。
- (26) 浜林『イギリス名誉革命史(上)』、174-193頁。青柳、『イングランド国教会』、112-120頁。
- (27) 青柳『イングランド国教会』、89-104、121-134頁。
- (28) 近藤和彦(編)『長い18世紀のイギリス その政治社会』(山川出版社、2002年)、134-149頁。深沢克己、高山博(編)『信仰と他者——寛容と不寛容のヨーロッパ社会宗教史』(東京大学出版会、2006年)、145-152、156-171頁。
- (29) 浜林正夫『イギリス名誉革命史(下)』(未来社、1983年)、241-251頁。今井『イギリス史2』、264-268頁。柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦(編)『世界歴史体系 フランス史2——16世紀-19世紀なかば』(山川出版社、2011年)、225-227頁。
- (30) 須永隆『プロテスタント亡命難民の経済史』(昭和堂、2010年)、205-234頁。
- (31) Schwartz, *Knaves, Fools, Madmen*, pp. 6-8. Schwartz, *The French Prophets*, pp. 17-20.
- (32) Schwartz, *Knaves, Fools, Madmen*, pp. 9-11. Schwartz, *The French Prophets*, pp. 20-23. 「カミザール」は、「シャツ」の訛った言い方 (camisole) か、「夜襲 (camisade)」に由来するとされる。後述するカヴァリエは、名称の由来が武装解除した市民とのシャツの交換にあるとしている。ジャン・カヴァリエ(著)、二宮フサ(訳)『フランス・プロテスタントの反乱』(岩波書店、2012年)、189-190、471-472頁を参照せよ。
- (33) Schwartz, *Knaves, Fools, Madmen*, pp. 11-12. Schwartz, *The French Prophets*, pp. 23-26. カヴァリエ『フランス・プロテスタントの反乱』、262-275頁。
- (34) Schwartz, *Knaves, Fools, Madmen*, pp. 16-17. Schwartz, *The French Prophets*, pp. 54-62, 72-79.
- (35) 木崎『信仰の運命』、182-185頁。Schwartz, *Knaves, Fools, Madmen*, pp. 15-16. Schwartz, *The French Prophets*, pp. 79-85.

- (36) Schwartz, *Knaves, Fools, Madmen*, pp. 18-21. Schwartz, *The French Prophets*, pp. 84, 94-96.
- (37) Schwartz, *Knaves, Fools, Madmen*, pp. 16, 18-22. Schwartz, *The French Prophets*, pp. 107-112.
- (38) Nathaniel Spinckes, *The New Pretenders to Prophecy examin'd, and their Pretences shewn to be Groundless and False* (London, 1709), p. 510.
- (39) Schwartz, *The French Prophets*, pp. 111-123, 316-317. Schwartz, *Knaves, Fools, Madmen*, pp. 23-25.

翻訳

『熱狂に関する書簡 **** *卿へ⁽¹⁾』

ロンドン、印刷者 J・モーフェー、出版組合会館近辺⁽²⁾、1708年。

[3] 読者へ⁽³⁾

この書簡が昨年の中頃か終わり頃に書かれたということは一目瞭然ですが、大方これは私信に留めるよう予定されていたものでしょう⁽⁴⁾。とは言いながらもこの書簡は後になって幾人かの手に渡っていたらしいのですが、この印刷者が原稿を入手できたのはごく最近のことでありまして、そうでなければ皆さんはもっと良い頃合いにこれを手にしていたでしょう⁽⁵⁾。[4]

[5] 『熱狂に関する書簡⁽⁶⁾』

閣下へ

今ではあなたも……へと戻られ、重みを増す国事へとその身を投じられる時期も目前に迫っているのですが、もしも少しばかり、他愛ない思索を、職務や政務とは何の関係も無いただ戯れのためにするような思索を楽しみたいという気持ちがおありでしたら、この先をご覧になってはいかがでしょう、[6] そしてもしも心を引くところがあれば、暇に合わせてお読みになってはいかがでしょう⁽⁷⁾。

詩人には自分の作品の始めにムーサなるものへ語りかける風習がありますが、この古代人の慣わしは大変評判でありまして、この時代になっても引切り無しに模倣されているのがわかります⁽⁸⁾。しかし、この模倣が人々の判断のおかげでこうして通用しているとはいえ、流行や通俗な趣味よりも優れた基準で物事を吟

味している閣下は遅かれ早かれこれに訝しさを覚えられるのではないかと想像してしまいます⁽⁹⁾。きっとあなたは、あのような役柄を演じなくてはならない詩人たちから甚だしい無理強いを見てとるでしょうし、もしかすると、古代にあれほど似合っている熱狂の装いが、[7] どうして現代ではこれほど魂の抜けた不恰好なものになってしまうのかとお思いになるかもしれません。しかし、この疑問なら閣下はご自分ですぐに解消なさってしまうでしょうし、これがあなたに思い起こさせるものと言え、創作であっても真実に司られており、ただ真実に似ているということによってこそ快い以上、真実はこの世で最も力強いものなのだという、事あるごとによくなされる一つの反省だけでしょう。情念を心地よく表象させるためには迫真性が必要であり、他の人を感動させるには、まず自分自身ももっともな理由から感動していなくてはならない、あるいは少なくとも感動しているように映らなくてはならないのです⁽¹⁰⁾。それでは、アポロンを崇拝しているとも思えず、ムーサのような神々を認めているとも思われない現代人が、私たちを言いくるめて上辺だけの信心深さを感じ取らせたり、過ぎ去りし時代の宗教に対する見せかけの熱情でもって私たちを感動させたりし得る可能性はどれほどのものでしょうか？ [8] 一方で、古代人について言えば、この人々の宗教と統治術はムーサの術に由来していたことが知られています⁽¹¹⁾。それならば、他にもないあの時代の詩人が信心深い陶酔に浸りながら機知と学問の守護神と認められる者たちに語りかけるということはどんなに自然に見えるのでしょうか？ この詩人が実際には全く陶酔を感じていないのにこれを装ってるといふこともあり得ますが、仮にこの陶酔をただの装いとしてみましても、それは依然としてどこか自然に見えるでしょうし、快くなり損なうことも決して無いでしょう。

しかしながら、閣下、この問題にはおそらく更なる神秘があるのです。閣下もご存知の通り、人間は本気で自分を欺くときにはいつも驚くほど優れた才能を発揮するものであり、ほんの少しの情念の土台があれば、私たちはこの情念を奮い立たせるどころか、[9] 自分だけでは及ばないところまでこれを掻き立てし

まうのです⁽¹²⁾。例えば、色恋らしい様子が少しでもあって、しかもロマンスか小説の助けもあるとなれば、十五の少年も、真面目な五十の中年も、全く独りで伊達男になって麗しいパッションを一途に抱くはずで⁽¹³⁾。それなりに人柄の良い人も、少し腹立たしい目に遭えば、憤りを募らせてまさに復讐の鬼となってしまいます。善良なキリスト者でさえ、きっと善良過ぎるあまり自分の信仰が足りていないと考えるのでしょうが、聖典と伝承における全ての奇跡に留まらず、老婆語りという堅固な体系まで包括するほどに自分の信仰を大きく広げてしまうことがあるのです⁽¹⁴⁾。必要とあらば閣下にも思い出していただきたいのですが、名声と学識を兼ね備えた真のキリスト者であり、あなたもご存知のある高位聖職者の方は、[10] 自分が妖精について信じていることをたっぷりお話しして下さることでしょう。一方、こうして自らを信仰で満たしている私たちキリスト者が情けない異教徒たちに認めてやるものではありません。この者たちはどう考えても信仰無き者です。私たちは、あまりに理不尽であるために俗人しか信じてこなかったものと断じ、異教徒たちが自分たちの宗教を信じることを認めないでしょう。とはいえ、キリスト教の高位聖職者の先生が信仰を強く志す余り、通常のカトリックの規定を超えて妖精を信じるに至ることが許されるのであれば、異教の詩人がその宗教の通常のある方の中でムーサを信じるということはどうして認められないのでしょうか⁽¹⁵⁾ というのも、閣下もご存知の通り、異教の教義によればムーサとは一定人数の神々のことで、これはその神学体系に欠かせないものです。この女神たちには、[11] 他の神々と同じように自分たちのための寺院や礼拝があり、この神聖なる九神を信じない、あるいは彼女たちのアポロンを信じないということは、ユピテル自身を否定することに等しく、大半のまともな人々からもそれくらい冒瀆的で無神論的なものとみなされていたはずで⁽¹⁶⁾。それならば、古代の詩人にとって、そこで正統派であるということ、加えて、教育と心意気の助けで高められて神の存在感と天来の靈感を確信するに至るということは、どれほど大きな強みになったことでしょうか⁽¹⁶⁾。このように啓示が詩人の技術の大きな力となっていた時代において、この啓示の真偽を問うこ

とは詩人が関わり合うことではありませんでした。反対に、一たび信仰を奮い立たせてあの天使たちの輪まで自分を引き上げた詩人は、必ずやあらん限りの命をその信仰に吹き込んだことでしょう。このような想像上の存在感が才人をどれほど高揚させるのかということについては、[12] 日常に見受けられる存在感が人々に及ぼす影響を観察するだけでもわかります。現代の文人は、自分が仲間について抱いた意見や、自分が語りかけている人物について形作った観念に多かれ少なかれ奮い起こされるものです。世間並みの舞台俳優も、満員の上質な観客に高揚することで普段の調子をどれだけ超えていけるものなのかを伝えてくれるでしょう。そして閣下、あなたはこの地上という舞台に立った命限りある者たちの中で最も高貴な役柄を割り当てられた最も高貴な俳優でいらっしゃると思いますが、あなたが自由と人間のために役をこなしていくとき、公衆やあなたの友人、あなたと志を同じくする者たちの存在感があなたの思考と才能に何か付け加えはしないのでしょうか？ それとも、あなたが公的な場面でお見せになるあの理性の崇高さ、あの弁論の力強さと、あなたが私的な場面で同じように操っているもの、つまり、[13] あなたが一人にいるときも、取るに足りない集まりの中にいるときも、寛いでいる時も、冷めている時も、常に使いこなせているものは全く同じものなのでしょうか？ 確かにそれはますます神がかったことかもしれませんが、思うに普通の人間がそこまでの高みに至ることはないでしょう。私はと申しますと、閣下、何か大きな存在感や多人数の集まりがなくては自分の思考を奮い立たせられないことは承知していますから、一人にいるときにはその穴を空想の強さで埋めるよう努めなくてはならず、ムーサがいない代わりに、普通の才人を上回る偉人を探し出して、普通に感じられる以上の存在感を想像させてもらわなくてはなりません。そこで閣下、私はあなたに語りかけることを選んだのでありまして、署名は抜きにしてあなたに赤の他人として読みたい分だけを読むという気ままな自由を贈る一方で、[14] あなたが友人のように、すなわち、この後からの親しみを込めた自由なもてなしが許される方のように、これを入念に読み通してくださるという想像から恩恵を授かろうと思っているのです。

脆弱さや低劣さの暴き方に通じることが、その反対のものである美德を十分に保護することになるのであれば、私たちが生きている時代はどれほど卓越していると考えられるでしょう！ あらゆる種類の愚昧さや異常さがこれほど鋭く検査され、これほど機知を効かせて笑われる時代は知る限りありません⁽¹⁷⁾。私たちはどんな気質不全にかかっても自分たちの治療法を上手く処方されるのですから、少なくともこの良好な兆候からだけでも、私たちの時代は全く衰退期ではないと期待してよいでしょう⁽¹⁸⁾。個人において、欠点を指摘されても辛抱できるということは改善の一番の証です。[15] 一つの国がそのような状態にあることは滅多にありません⁽¹⁹⁾。国家の警戒や有力者の退廃した生活といった事情に糾弾の自由を部分的にでも制限する力があると、結果としてそれは糾弾の恩恵を全面的に打ち消してしまうのです。作法に対する公平で自由な糾弾というものは、特定の慣習や国家の意見が分け隔てられて批判を免れているのみならず、最高の技術で迎合されているようなところではあり得ません。欺瞞に特権がなく、宮廷の信頼も、貴族の権力も、そして教会の荘厳さも、どんな格好であれ、欺瞞を保護したり、欺瞞に対する詰問を妨げたりできないということは私たちの国のように自由な国でしかあり得ません。なるほど、こうした自由は行き過ぎたものと見られるかもしれませんが。私たちは自由を悪用していると言われるかもしれませんが。しかし、誰を判定人にしましょう？ [16] 自由一般にはどんな治療法を施しましょう？ 苦情の種になっている自由そのものに委ねる以上の治療法があるでしょうか？ もしも人々が理性を下手に用いているのなら、その人々により上手な理性の用い方を教えるのはやはり理性でなくてはならないのです。思考や文体の適切さ、作法の洗練、品性の良さ、あらゆる種類の礼節といったものは、何が最善なのかという試行と経験からしか生まれては来ません。探し求めるがままにしておきましょう、そうすればやがて全ての物事の正しい基準が見つかるでしょう。どんなユーモアが登場してきても、不自然なものなら長持ちはしないでしょうし、笑いにしても、最初は場違いであるにせよ、最後にはふさわしいところに

落ち着くでしょう。

良識ある人々が、あたかも自分自身の判断力を信用していないかのように、ある決まった主題では笑いに近寄らないようにと強く警告するのを見るたび私はよく疑問を感じていました。[17] というのも、理性に逆らってどう笑えるというのでしょうか？ 少しでも適切な思考ができる人であれば、場違いな笑いにどうして我慢できるのでしょうか？ そのような笑い以上に笑えるものはありません。確かに俗人であれば、汚い戯言でも、ただのおふざけや茶番でも喉を通るでしょうが、良識と品性を備えた人を掴むものは、もっと上質で真正な機知のはずです。それならば、理性を用いる際にこうも臆病者になり、笑いの試験にかけられることをこうも恐れるとはどうしたことなのでしょう？ ——なるほど！ 主題が余りに真面目だと言うのでしょうか——そうなのかもしれませんが、まずはその主題が本当に真面目なものかどうかを確かめてみましょう、そうしなければ、私たちがこれを認識する仕方として、私たちの想像からすれば大変に真面目で重大なものであるのに、そのものの本性からすれば大変に見当違いでおかしなものであるということになるかもしれません。真面目さは欺瞞にとって欠かすことのできないものです。[18] 真面目さのせいで、私たちは他の物事について間違っただけでなく、真面目さ自体についても絶えず間違いそうになるのです。普段の振る舞いにしても、形式ばった振る舞いの外にずっと留まるとするのは真面目な人物にとってどんなに大変なことでしょう。自分が実際真面目だということが確かなら、真面目になり過ぎることはあり得ませんし、ある物事が自分が把握する通りに真面目なものだということが確かなら、それを真面目さのために称え過ぎたり崇め過ぎたりすることも無いでしょう。肝心なのは、常に本物の真面目さを偽物の真面目さから見分けることであり、このことは、常にある規則を身から離さず、自分の周りの物事だけではなく自分自身にもその規則を当てはめることによってのみ達せられます。なぜなら、自分自身についての基準を失ってしまえば、やがて他のあらゆる物事についての基準も失ってしまうからです。さて、本

当に真面目なものと本当はおかしなものを見分ける上で、物事の実際の性質について考えるということ以外に一体どんな規則や基準があるのでしょうか？ [19] そしてこのことは、笑いを仕掛け、持ち堪えられるかどうかを確かめる以外にどうやって達せられ得るのでしょうか？ また一方で、ある物事にこの規則を当てはめることを恐れるなら、一切の物事において形式主義という欺瞞からどう身を守り得るのでしょうか？ 一点で形式主義者になることを許してしまったならば、同じ形式主義が他の全ての点で私たちを支配するでしょう⁽²⁰⁾。私たちはどんな状態でも物事を判断できるわけではありません。私たちは最初に自分自身の気質について判断し、それに応じて、私たちの判断に委ねられる他の物事についても判断しなくてはなりません。とはいえ、少なくとも私たちの知る限り、判断の資格を放棄しているとき以上に、つまり、真面目さについての思い込みを抱き、大変おかしな者となり、この世で最もおかしな物事に対して深く感嘆しているとき以上に、物事について、そしてそれを判断する自分の気質について判断ごっこをしているときはありません。[20] 試すまいと心を決めている限り、確かめることはできないのですから。

——しばしば、おかしさは辛辣さよりも力強く巧みに大事を解決する⁽²¹⁾。

ホラティウス『風刺詩』第十歌

閣下、このことはそれ自体真実であり、また、当代の狡猾な形式主義者にも真実だと知られているために、この輩は、自分の欺瞞に冗談が飛ばされると想像し得る限り激しく苦々しい気持ちになりながらも、この他のやり方でこの欺瞞にそっと触れられるときに比べても、より巧みに耐えられるでしょう⁽²²⁾。この形式主義者たちは、風潮や流行も、また同様に意見も、どれほどおかしなものであれ、厳粛さによって維持され得るということ、また、陰鬱な雰囲気の中で成長し、深刻に認識された形式的な理解は、[21] まともな種類の快活さの中でしか、より安らかで快い考え方によってしか取り除かれることがないということを知ってい

るのです⁽²³⁾。どんな熱狂にも憂鬱が伴っているものです。愛にせよ宗教心にせよ（というのもどちらにも熱狂が起こるのです）、憂鬱が取り除かれ、極端に走るおかしさに対して言われ得ることに心が自由に耳を傾けるようにならなければ、増大していく害悪に終止符を打つことはできません⁽²⁴⁾。

人々に好きなだけ馬鹿をやらせておくということ、笑うにしか値しないもの、そうした罪の無い治療法によってこそ最も良く治癒するようなものには決して真剣な刑罰を課さないということ、従来これが賢明な国々の知恵でした。人間の中には、はげ口が無くてはならないような体液があります。人間は生まれつき心身の両方が [22] 動揺に影響されやすく、血中に異様な発酵素があるときに多くの部位で異常な排出が起こるように、理性に異様な発酵素があるときも必ず発酵によって異質粒子が排出されるのです⁽²⁵⁾。内科医が無条件にその体内の発酵素の鎮静に努め、このような噴出に姿を現す体液を内攻させるならば、疫病を発生させ、春の高熱症や秋の過食を悪性の流行熱へと変えてしまう可能性があります⁽²⁶⁾。心のこのような噴出を断固として弱める者は、政治体の藪医者のような者に違いなく、この迷信という痒みを治癒して熱狂の感染から魂を救うかのように見せかけながら自然を大混乱に陥れ、二三の無害な膿疱を [23] 炎症や致死性の壊疽へと変えてしまうのです⁽²⁷⁾。

歴史書には、パッカスに連れられてインド諸国へ遠出していたパンが、鬱蒼とした谷の反響しやすい岩石や洞穴の間で雄叫びを活用すれば、少数の仲間でも多数の敵勢を怯えさせる手が打てることに気づいた、ということが書いてあります⁽²⁸⁾。暗く荒涼とした土地の凍るような風景が洞窟の馬の嘶きに加わって敵の恐怖心を煽ったために、敵は想像を膨らませて人間離れした声を耳にし、きっとそのような姿も目にしたのであり、自分たちが恐れるものの不確かさに恐れは一層募り、その無言の表情は言葉で伝える以上の速さでこの恐れを広めていったのです。そして、これは後の時代に人がパニックと呼ぶようになるものでした。[24] 実際

この物語は、熱狂や迷信的な種類の恐怖心が混ざらないことが減多にないこの情念の本性について良い示唆を与えてくれます。

どんな情念であれ、群衆の中で発生し、外観から、もしくは言わば接触や共感から伝わるのであれば、それをパニックと呼ぶ根拠が十分にあるのです。例えば、私たちが時々体験することですが、民衆の激昂が民衆自身の手には負えないものになるとき、そして宗教が関わっている場合には特に、こうした民衆の激情をパニックと呼んで良いでしょう。そしてこのような状況では、民衆の顔つきそのものが伝染していくのです。その激情は顔から顔へと飛び移り、その病気は目撃するやいなや発症してしまうのです。この情念の支配下にある群衆をそれよりましな精神状態から見たことがある人なら、人々の表情の中に、[25] 他の最も感情的な状態の時に表れる以上に鬼気迫ったおぞましいものが伺えたと認めるでしょう。善い情念に対しても悪い情念に対しても、社会というものはそのような力を持つのであり、どんな感情でも、社会的で伝達的になることで随分と強大になるのです。

このように、閣下、人間にはただ恐れから来るものの他にも多くのパニックがあるのです。例えば、宗教心も何らかの種の熱狂が起こっているときにはパニックとなるのですが、例によってこの熱狂も憂鬱な状況になることで起こるでしょう。というのも、蒸散気は自然に発生するものである上に、公災に遭ったり、空気や食べ物が健康的でなかったりして人間の精気が低調であるときや、自然に発作が起こり、暴風雨や地震といった驚異が起こったりしているときといった悪いときには一層発生するものですし、そうした時期にはきっとパニックも激しくなるでしょうが、[26] 治安判事は必ずこれに道を譲ってやらなくてはなりません⁽²⁹⁾。なぜなら、真剣な治療法を採って刀剣や東棹を治療薬として持ち出すことは、事態をより憂鬱なものとし、この気質不全のまさに原因そのものを増大させるに違いないからです。人々の自然な恐れを禁止し、これを別の恐れによって圧倒しよ

うと努めるのは、極めて不自然な方策です。いやしくも技術者であるのなら、治安判事はより柔らかな手立てを用いるべきであり、焼灼、切開、切断の代わりに最も刺激の無い香油を用いるべきであり、優しい共感を通して人々の憂いに入り込み、その情念を引き受けるかのようにしながら、自らその情念を和らげ解消したならば、人々の情念を快活なやり方で晴らして癒すよう努めるべきなのです。

これは古代の統治術でしたが、これからも〔27〕（私たちの国のある高名な著者が述べているように）民衆に宗教面での公的誘導があるということが必要なのです⁽³⁰⁾。治安判事に礼拝を許さないということや国立教会を取り去るということは、迫害を執り行おうという発想と同じ単なる熱狂なのです。どうして個人の庭園があるように公共の歩道があってはならないのでしょうか？ どうして個人教育や家庭教師があるように公共の図書館があってはならないのでしょうか？ また一方で、空想や思弁に限度を定めること、人間の懸念や宗教的信念、恐れを律すること、熱狂という自然な情念を暴力で抑えること、あるいは、熱狂を規定し、一種類に還元し、一律に分類しようと努めることの意義やそれに見合う評判と言えば、真実のところ、恋愛での同じような企てについて喜劇作家が言い切っている通りのものです。

——〔28〕 理性をもって発狂すべく努力するようなもので、得るものは何もありません⁽³¹⁾。

閣下もご存知の通り、古代人の中ではあらゆる種類の幻視者や熱狂者が寛容に扱われていたのですが、その一方で、哲学にも同じくらい自由な流儀があり、これは迷信とバランスを取るものとして許容されていたのです。そして、ピタゴラス派や後代のプラトン派などの諸セクトが当時の迷信や熱狂の仲間入りをしていた一方で、エピクロス派やアカデメイア派なども機知や冗談をこれに対して全力で用いることを許されていました。こうして事態のバランスは保たれ、理性は

正々堂々と戦い、学識と学問が活躍していたのです。この拮抗から生じた調和と節度は驚くべきものでした。こうして迷信や狂信は穏やかに扱われ、[29] 放っておいてもこの世界に流血沙汰や戦乱、迫害、荒廃をもたらすほどの激しさに至ることは決してありませんでした。しかし、あの世まで及んで現世の生と幸福以上に来世の生と幸福を配慮するという新手の方針は、私たちに自然な人間性の限界を越えさせ、そして、極めて信心深い互いの苦しみ方を超自然的な慈愛から教えてくれました。この方針は、現世的な関心には生み出せないような反感を生み出し、私たちに未来永劫の相互憎悪を授けてくれました。そして今や、意見の統一（何とも頼もしい企てですね！）はこの害悪に対する唯一の対処法だとみなされています。魂を救うということは、今では高揚した精神の英雄的な悲願であり、また、治安判事の一番の関心事となり、統治そのもののまさに目的となっているのです⁽³²⁾。

[30] 治安判事の職務がご親切にも学問に口を挟んでくださるとしたら、私たちは残念ながら、法律で厳密な正統教義が定められている国によくある神学のように、粗悪な論理学、粗悪な数学、そしてあらゆる種類の粗悪な哲学を手にすることになるでしょう。政府が機知を落ち着かせるというのは難題なのです。もしも政府が私たちをまともで誠実にしておいてくれれば、宗教の事柄でも世俗の事柄でも私たちは大変な力量を備えるでしょうし、もしも私たちを信用しておいてくれれば、偏見が道を塞がぬ限り、私たちは自分たち自身を救うに足る機知を身に着けるでしょう。一方、もしも誠実さと機知がこの救いの仕事において力不足であるなら、他の人と同じくらい間違いを犯しやすい以上、どれほど有徳で賢明な治安判事がここで世話を焼いても無駄なことなのです。私は、[31] 人間の良識を救い、この世の機知をいくらかでも保存する唯一の道は、機知に自由を授けてやることだと確信しております。さて、真剣な異常さや鬱積した気分に対しては冗談以外に治療法がないのですから、冗談の自由が奪われているところには機知の自由もあり得ないのです。

実のところ私たちは他の全てにおいては鬱積を取り鎮める力を十分に持っています。他の熱狂は好きなように扱ってよいのです。私たちは恋情や武勇、騎士修行といったものを思いきり笑うことができますし、かつてあれほど栄えていたこの種の気分も機知豊かな昨今にあっては随分と減退しております。十字軍や聖地の回復、あのような信心深い武俠もかつてほどには求められなくなりましたが、この好戦的な宗教心や靈魂救済精神、[32] そして聖人修行にどこか依然として根強いところがあるとしても、この気質不全を扱う仕方がどれくらい厳粛であり、熱狂の治療をどれほどあべこべに進めているかを考えてみれば、驚くことでもないのです。

私はどうしても想像せずにはいられないのですが、もしも、他ならぬ異端審問、あるいは形式ばった司法裁判所が真面目な役人と裁判官と共に設置され、詩的自由を制限し、詩作の夢想や気分を一般に抑圧し、詩人がウエヌスやクピドといった異教の衣装を着せて語るような、異常に燃えたる個々の恋情を抑圧したなら、もしも、詩人がこの異端の首謀者ないし教祖とされ、空虚な韻律を踏んで民衆を魅了することを厳罰によって禁じられたなら、また他方で、民衆が同じような厳罰によって、こうした誘惑に耳を傾けることを禁じられ、[33] 演劇や小説、バラッドの中でも恋物語に注意を向けることを禁じられたなら、おそらくこの重い迫害の最中から新たなアルカディアの出現を目にすることになるでしょうし、老若の民衆が詩作精神に捕われ、恋人たちや詩人たちの野外秘密礼拝が起り、森林はロマンティックな羊飼いの男女に満たされ、岩石は愛の力に捧げられた賛歌と賛辞に反響するということになるでしょう。そうなれば、異教の全系列の神々が連れ戻され、かつてキプロスやデロスといったより温暖なギリシア地方がそうであったように、私たちの寒冷な北方の島もウエヌスとアポロンのための数多くの祭壇で燃え上がることが十分見込めるでしょう。

とはいえ、閣下、もしかするとあなたは、私が宗教のような真面目な主題に立ち入りながら、[34] 我を忘れて冗談やユーモアに道を譲っていることを不思議に思うかもしれません。閣下、私はあなたにこうなったことが単なる偶然によるものではないことを告白しなくてはなりません。真実を申しますと、私は、自分が出来る限り明朗な気分で行われるように努めないのであれば、この主題について考えることすらしたくありませんし、書くことなどなおさらです。なるほど、民衆は、中位の気質を保つことが無く、全く雰囲気や気分そのものでありますが、宗教に対する疑念や躊躇をほとんど知らず、また、信心深い憂鬱ないし熱狂が気質の中に定着して習慣的なものとなるにはより多くの熟慮や慎重な実践が必要であるために、これからの直接的な影響も免れています。習慣となるものはそうなるに任せればよいでしょうが、浅薄さや狂気といった悲しい対価を払って習慣を生むなどという貧乏くじは引きたくありません。宗教についての思考を気晴らしで追い払うよりは、[35] 宗教と共にあらゆる冒険を潜り抜けたいのです⁽³³⁾。私が目指すことは宗教について正しい気分で考えるということに尽きるものであり、私が論証に努めるのは、このことが宗教について正しく考える道の半分以上に当たるということなのです。

至高の存在についての正しい思考とふさわしい理解が真実の礼拝と崇拜の土台となるのであれば、陰鬱な気分の他にこの点で間違いを犯させるものが無いことはほとんど確かですから、明朗な気分こそ熱狂に対する最善の防備であるのみならず、敬虔さと真の宗教心の最善の土台でもあるということになります。この世がある悪魔的で悪意のある力によって統治されていると考えさせるものは、自然なものにせよ、強いられたものにせよ、陰鬱な気分以外にはあり得ません。[36] 人を説得して全ての物事は概して優しく善良に秩序づけられているという気分させようとする議論が余りに多く存在しているため、事態を好意的に捉えることを止めて、事態は全て無作為に進んでおり、この世界には意味も意義もないのだと想像することが不可能に思えるくらいですから、陰鬱な気分以外のもの

が無神論の原因になり得るかどうかということも大変な問題だと思います。しかし、これは私が確信していることなのですが、至高の支配者についてのおぞましい考えや陰鬱な考えを授けるのは陰鬱な気分以外にありません。このような存在の陰湿さや陰悪さについて確信させ得るものは、自分の中に先立って存在する似た種類の感覚以外にありませんし、もしも私たちが宗教に明朗な気分を持ち込むことや神のような主題を自由に楽しく考えることを恐れるとすれば、それは、私たちがその主題を自分自身とよく似せて認識していて、[37] そこに伴う峻厳さや気難しさを抜きにして威厳や偉大さの観念を抱くことがほとんどできないからなのです。しかし、この性格は、私たちが時々自分たちの間で最高の権力を持つ人物の中に認めて、ほとんど神のごとき善良さであると考えようような性格と正反対のものでありますし、この人物が本当に善良であるとみなされるならば、私たちが思い切って自由に扱ってもこの人物はそうした自由を不快がらないはずだと確信できるでしょう。この人物が検査され親しく吟味されるほどこうした立派さは姿を現すでしょうし、これを知った者も、自分の上位に立つ者が更に寛大さを備えていることを証明し、自分が体験した公明さと高邁さについて反省した暁には、こうした成功に魅了されながら、それまで以上にこの人物を尊敬し愛するでしょうから、この人物はその善良さによって二重に得をすることになるのです。閣下はおそらくこの神秘について誰よりもご存知でしょう。そうでなければ、[38] あなたはどうやって権力の中で愛されながら権力の外で支持され一層愛されているのでしょうか？

注

- (1) 「****卿へ (to My Lord ****)」という箇所は、1732年版になると「サマーズ卿へ (to My Lord Sommers)」と書き換えられる。これは政治家ジョン・サマーズ (John Somers, 1651-1716) のことであろう。
- (2) 「書籍出版業者 (Stationer)」は1560年に認可を受けたギルドであり、その会館 (Hall) はロンドン大火以降に再建された。蛭川久康、櫻庭信之、定松正、松村昌家、Paul Snowden (編著)『ロンドン事典』(大修館書店、2002年)より「書籍出

版業者同業組合会館 (Stationers' Hall)」の記事を参照せよ。

- (3) 1711年版よりこの序文は無くなる。
- (4) 1711年版になると、冒頭に「1707年9月」という表記が挿入されている。
- (5) 『熱狂書簡』は出版以前にサマーズの周辺で回覧されていた。ここで「良い頃合い (in season)」と言われているのは、フランス預言派を始めとする同時期の出来事へ言及しているからであろう。
- (6) 原文に忠実に訳せば「書簡云々 (A Letter, &c.)」となるが、ここは体裁を考えて補った。
- (7) 「戻る (be returned to)」は過去分詞を用いて「戻る (return to)」と同じ意味を持つ (OED, return, v.1, I.1.c)。ここで省略されているのは『熱狂書簡』の草稿の宛て先である地名「ブルックマン (Brookman)」ということになる。これも個人の特定を避けた省略なのだろう。この直後の「目前に迫っている」時期とは、10月から始まる議会の会期のことであろう。Wolf, *An Old Spelling*, p. 111.
- (8) 文芸を司るムーサへの呼びかけは古代のみならず近世にもしばしば見られる詩人の伝統であった。古代の例としてホメロスの『イリアス』を、同時代の例としてミルトン (John Milton, 1608-1674) の『失樂園』を挙げておく。
John Dryden (trans.), *Fables Ancient and Modern; Translated into Verse, from Homer, Ovid, Boccace, & Chaucer: with Original Poems* (London, 1700), p. 189. ホメロス (著)、松平千秋 (訳)『イリアス (上)』(岩波書店、2009年)、11頁。John Milton, *Paradise lost* (London, 1667), line 6. ジョン・ミルトン (著)、平井正穂 (訳)『失樂園』(岩波書店、2005年)、7、327頁。
- (9) 「訝しむ (stick with)」は「受け入れがたい (unacceptable / uncredible) 状態」という意味で取った (OED, stick, v.1, phrasal verb, to stick with, 3.)。
- (10) 1705年に出版されたアリストテレス『詩学』の英訳解説版では、「等しい才能を持つ二人がいるなら、情念のうちにある者が最も説得的であることは確かだが、その証拠は、真に感動している者はそれに耳を傾ける人々を動かすということにある」のだから、「詩作において成功するためには、卓越した才能を持つか、熱狂者にならなくてはならない」と述べられている。
Aristotle, *Aristotle's Art of Poetry. Translated from the Original Greek, according to Mr. Theodore Goulston's Edition. Together, With Mr. D'acier's Notes Translated from the French* (London, 1705), pp. 291-292.
- (11) ムーサと統治および宗教の結びつきは、「神がかりにあっている (enthousiazō)」神官、詩人、政治家に触れるプラトンの『メノン』(99B-100C) や、ムーサが神々を賛美する詩と王の弁論の技術を授けると歌うヘシオドスの『神統記』に伺える。ここでは両者の記述に合わせて「統治術 (polity)」という訳語を選んだ。プラトン (著)、藤沢令夫 (訳)、『メノン』(岩波書店、2011年)、115-118頁、および、ヘシオドス (著)、中務哲郎 (訳)『ヘシオドス 全作品』(京都大学学術出版会、2013年)、92-94、96-97頁を参照せよ。
- (12) 「優れた (happy in)」は「巧みな (skillful / dexterous)」という意味で取った (OED, happy, adj. and n., A.II.4.a.)。また、「掻き立てる (work into)」は「感情な

どをかき立てる (excite / rouse)」という意味で取った (OED, work, v., VI.39.b)。

- (13) 「ロマンス (romance)」と「小説 (novel)」の違いは作品の長短や実生活との距離感に存していたようである (OED, novel, n., 4.b.)。「美しいパッション (Belle Passion)」はフランス風の言い回しで「恋情 (love)」を指す (OED, belle, adj. and n., A.2.b.)。ここでは外来風の表現が挿入されていることを伝えるために片仮名語の「パッション」を訳語に採り入れた。こうしないのであれば、「美しい熱情」のように訳せるだろう。
- (14) 「善良なキリスト者 (good Christian)」とされているのは、グロセスター主教エドワード・フォウラー (Edward Fowler, 1632-1714) である。出版業者モーゼス・ピット (bap. 1639, d. 1697) は自分の乳母が妖精について語ったことを本にして出版しており、この著作はフォウラーに宛てた書簡という体裁になっている。「老婆語り (Old-wives' stories)」とは、聖書の「テモテの信徒への第一書簡」まで遡れる表現であり、俗信を指して用いられる。
Moses Pitt, *An Account of Ann Jeffries* (London, 1696). C. Scott Dixon, Dagmar Freist and Mark Grengross, *Living with religious Diversity in early-modern Europe* (Farnham, 2009), pp. 140-156. Angela Mcshane and Garthine Walker (eds.), *The Extraordinary and the Everyday in Early Modern England* (Houndmills & New York, 2010), pp. 127-137. Jane Shaw, *Miracles in Enlightenment England* (New Haven & London, 2006), pp. 146-150.
- (15) 「先生 (Reverend)」は聖職者に向けて用いられた尊称の表現である (OED, reverend, adj. and n., A.1.c.)。
- (16) 「意気込み (a Good-Will)」は「善意」ではなく「熱心さ (eagerness / readiness / willingness)」という意味で取った (OED, Goodwill, n., 3.a.)。「存在感 (presence)」という訳語は聖俗関わり無く広く文意を良く伝えるために選択した。
- (17) ここでの「私たちが生きている時代」は、いわゆるオーガスタン時代 (アウグストゥス時代) と重ねてよいだろう。シャフツベリを含めたこの時期の機知論については、例えば Endre Szécsényi, "Freedom and Sentiments: Wit and Humour in the Augustan age," *Hungarian Journal of English and American Studies (HJEAS)*, Vol. 13, No. 1/2, *The Long Eighteenth Century* (Spring-Fall, 2007), pp. 79-92のような研究がある。
- (18) 「気質不全 (distemper)」は「気分 (体液) や気質の乱れ (Derangement or disturbance of the 'humour' or 'temper')」という意味で取った (OED, distemper, n.1., 3.)。
- (19) 「国 (a public)」は、「国家 (the nation, the state)」という意味で取った (OED, public, adj. and n., B.2.a.)。
- (20) 「形式ばった (formal)」「形式主義 (formality)」「形式主義者 (formalist)」という語彙は、近世イングランドではよく「偽善 (hypocrisy)」と共に用いられた。例えば、ジョン・バニヤン (John Bunyan, bap. 1628, d. 1688) の『天路歷程』でも、主人公が旅の途中で「形式主義者」と「偽善者」という二人組と出会って短い討論をしている。John Bunyan, *The Pilgrim's Progress from This World to That which is to Come* (London, 1678), pp. 38-40 を参照せよ。

- (21) 既存の日本語訳については、鈴木一郎（訳）『ホラティウス全集』（玉川大学出版部、2001年）、103頁を参照せよ。
- (22) 「一方で（with all）」は「にも関わらず（notwithstanding）」の意味で取った（*OED*, with, prep., adv., and conj., I.31.b.b）。
- (23) 「深刻に（in sober sadness）」は「真剣さ（seriousness）」の意味で取った（*OED*, sadness, n., I.2）。
- (24) シヤフツベリが宗教的熱狂として捉えている人々の症状は、古来、憂鬱症（Melancholy）についての医学的な研究において伝統的に言及されていた。Michael Heyd, *Be Sober and Reasonable: the Critique of Enthusiasm in seventeenth and early eighteenth centuries* (Brill, 1995), pp. 44-64.
- (25) 体内における「発酵（Fermentation）」とは近世医化学の概念である。発酵概念を近世イングランドで用いた一人に医学者トマス・ウィリス（Thomas Willis, 1621-1675）が挙げられる。シヤフツベリの医学的知識の詳しい由来はわからないが、「発酵」を始めとしたシヤフツベリの記述と対応が見られ、またその語彙についても他の著述家たちに比べてより整理された説明が得られることから、医学用語についてはウィリスの議論を翻訳の参考にしている。その議論によれば、「発酵」とは基本的に物の成長や変化に伴う粒子的な運動であり、動植物の発生や、生理的機能の活動に伴って起こっている。「異質粒子（heterogeneous particles）」は血液状態の異常などから起こる発酵不全の産物であり、通常は体外に排出される。Thomas Willis, *Dr. Willis's practice of physick being the whole works of that renowned and famous physician* (London, 1684) より Thomas Willis, *Of Fermentation and Feavers*, pp. 8, 13-14. 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤 上』（岩波書店、1998年）、304-318、331-334頁。
- (26) 「平穏な年であったとしても、毎年春と秋というのは、何かしら流行性の病が蔓延するのが常である。（Willis, *Of Fermentation and Feavers*, p. 119）」春と秋は気象条件の移り変りと共に様々な動植物に変化が起こる時期であり、致死的なものも含む流行病はこの時期により頻発するとされる。「高熱症（Ague）」は断続的な高熱の症状のことで、血液の状態や異質粒子に対する反応といった要因から生じる。また、「過食（Surfeit）」は文字通り暴飲暴食であって、これも消化を通して体液や血液の状態に影響を与えるものであった。
- (27) 「膿疱（Carbuncle）」とは鋭い痛みを伴う皮膚の腫れのことである。
- (28) ここでの「歴史書（History）」とは、ポリュアイノスの『戦術書』のことである。ポリュアイノス（著）、戸部順一（訳）『戦術書』（国文社、1999年）、15-16頁を参照せよ。
- (29) 「蒸散気（vapour）」は血液や体液から生じるより微細な粒子であり、それゆえに血管やリンパ管に運動空間が限られている体液に比べて移動範囲が広い。また、「公災（public calamity）」は、近世に疫病や飢饉、地震、戦災などを指して用いられた表現である。ある共同体全体にとっての災難というような意味合いであろう。翻訳は字を当てて熟語を作った。「精気（spirits）」は血液から作られて動物の活動を支えると考えた物質である。

- (30) 「公的誘導 (public leading)」という語彙は「高名な著者」ジェームズ・ハリントン (James Harrington, 1611-1677) の作品集に収録されている著作『立法術 (The Art of Lawgiving)』に由来する。公的誘導とは、国立教会などの形で国民の多数の良心を導きながら少数の良心の自由を認める国家宗教のあり方であり、国家の定める良心のあり方を強制する「公的操縦 (publick driving)」と対比される。James Harrington, John Toland (ed.), *The Oceana of James Harrington and his Other Works* (London, 1700), p. 448を参照せよ。
- (31) テレンティウス『宦官』からの引用である。既存の日本語訳については、谷栄一郎 (訳)、『宦官』、『ローマ喜劇集5』(京都大学学術出版会、2002年)、246頁を参照せよ。
- (32) 「悲願 (passion)」は「情熱的に求められる目標 (an aim or object pursued with zeal)」という意味で取った (OED, passion, n., I.9.b)。
- (33) 「気晴らし (Diversion)」はブレイズ・パスカル (Blaise Pascal, 1623-1662) と関係がある語彙と考えてよいだろう。

参考文献

- ・一次文献 (『熱狂書簡』)

[Shaftesbury, the 3rd Earl of]. *A Letter concerning Enthusiasm, to My Lord ****** (London, 1708).

[Shaftesbury, the 3rd Earl of]. *Characteristicks of Men, Manners, Opinions, Times* (London, 1711).

Shaftesbury, the 3rd Earl of. *Characteristicks of Men, Manners, Opinions, Times* (London, 1714).

Shaftesbury, the 3rd Earl of. *Characteristicks of Men, Manners, Opinions, Times* (London, 1732).

Wolf, Richard B., ed. *An Old-Spelling, Critical edition of Shaftesbury's Letter concerning Enthusiasm and Sensus Communis: An Essay on the Freedom of Wit and Humor* (New York & London, 1988).

- ・一次文献 (その他の近世イングランドの出版物)

The Compleat Statesman, demonstrated in the Life, Actions, and Politick of that Great Minister of State, Anthony Earl of Shaftesbury (London, 1683).

Glossographia Anglicana Nova (London, 1707).

The Holy Bible, containing the Old Testament and the New (Cambridge, 1683).

Aristotle. *Aristotle's Art of Poetry. translated from the original Greek, according to Mr. Theodore Goulston's edition. together, with Mr. D'acier's notes translated from the French* (London,

- 1705).
- Astell, Mary. *Bart'lemy Fair: or, An Enquiry after Wit* (London, 1709).
- Blount, Thomas. *Glossographia* (London, 1681).
- Bunyan, John. *The Pilgrim's Progress from This World to That Which is to Come* (London, 1678).
- Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy* (London, 1621).
- de Chambrun, Jacques Pineton. *The History of the Persecutions of the Protestants by the French King in the Principality of Orange, from the Year 1660, to the Year 1687* (London, 1689)
- Dryden, John, trans. *Fabeles Ancient and Modern; translated into Verse, from Homer, Ovid, Boccace, & Chaucer: with Original Poems* (London, 1700).
- Dryden, John, trans. *The Satires of Decimus Junius Juevenalis* (London, 1693).
- Harrington James. edited by John Toland. *The Oceana of James Harrington and his Other Works* (London, 1700).
- Hobbes, Thomas. *Leviathan or the Matter, Forme, and Power of a Commonwealth Ecclesiasticall and Civil* (London, 1651).
- Locke, John. *An Essay concerning Human Understanding* (London, 1700).
- Milton, John. *Paradise Lost* (London, 1667).
- More, Henry. *Enthusiasmus Triumphatus, or, a Discourse of the Nature, Causes, Kinds, and Cure, of Enthusiasme* (London, 1656).
- Pitt, Moses. *An Account of Ann Jeffries* (London, 1696).
- Shaftesbury. *Paradoxes of State. Relating to the Present Juncture of Affairs in England and the rest of Europe* (London, 1702).
- Shaftesbury. *Sensus Communis: An Essay on the Freedom of Wit and Humour* (London, 1709).
- Spinckes, Nathaniel. *The New Pretenders to Prophecy examin'd, and their Pretences shewn to be Groundless and False* (London, 1709).
- [Swift, John]. *A Tale of a Tub* (London, 1704).
- Whichcote, Benjamin. *Select Sermons of Dr. Whichcot* (London, 1698).
- Willis, Thomas. *Dr. Willis's Practice of Physick being the Whole Works of that Renowned and Famous Physician* (London, 1684).

・ 二次文献（英語）

- Adams, Geoffrey. *The Huguenots and French Opinion, 1685-1787: the Enlightenment Debate on Toleration* (Toronto, 1991).

- Clark, J.D.. *English Society 1660-1832: Religion, Ideology and Politics during the Ancien Regime* (Cambridge, 2000).
- Dixon, C. Scott, Dagmar Freist and Mark Grenggrass eds. *Living with Religious Diversity in early-modern Europe* (Farnham, 2009).
- Jack, Ian. *Augustan Satire: Intention and Idiom in English Poetry 1660-1750* (Oxford, 1952).
- Klein, Lawrence E., *Shaftesbury and the Culture of Politeness: Moral Discourse and Cultural Politics in eighteenth-century England* (Cambridge, 1994).
- Klein, Lawrence E. 'Cooper, Anthony Ashley, third earl of Shaftesbury (1671–1713),' *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004; online edition, Jan 2008 [<http://www.oxforddnb.com/view/article/6209>, accessed 30 Sept. 2015].
- Garrioch, David. *The Huguenots of Paris and the Coming of Religious Freedom, 1685-1789* (New York, 2014).
- Grean, Stanley. *Shaftesbury's Philosophy of Religion and Ethics: a Study in Enthusiasm* (Ohio, 1967).
- Goldie, Mark. 'Cambridge Platonists (act. 1630s–1680s),' *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press. [<http://www.oxforddnb.com/view/theme/94274>, accessed 30 Sept. 2015].
- Heyd, Michael. *Be Sober and Reasonable: the Critique of Enthusiasm in seventeenth and early eighteenth centuries* (Brill, 1995).
- Knox, Ronald A.. *Enthusiasm: a Chapter in the History of Religion with special reference to the XVII and XVIII centuries* (New York & Oxford, 1950).
- Lindemann, Mary. *Medicine and Society in Early Modern Europe* (Cambridge, 1999).
- Lydia, Amir. *Humor and the Good Life in Modern Philosophy: Shaftesbury, Hamann, Kerkegaard* (Albany, 2014).
- Mcshane, Angela and Garthine Walker, eds. *The Extraordinary and the Everyday in Early Modern England* (Houndmills & New York, 2010)
- Schwartz, Hillel. *Knaves, Fools, Madmen, and that Subtle Effluviium: A Study of the Opposition to the French Prophets in England, 1706-1710* (Gainesville, 1978).
- Schwartz, Hillel. *The French Prophets: the History of a Millenarian group in eighteenth-century England* (Berkeley, 1980).
- Shaw, Jane. *Miracles in Enlightenment England* (New Haven & London, 2006).
- Spentzou, Efrossini, Don Fowler, eds. *Cultivating the Muse: Struggles for Power and Inspiration in Classical Literature* (Oxford, 2002).
- Stuart, Handley. 'Somers, John, Baron Somers (1651–1716),' *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004; online edition, May 2008 [<http://www.oxforddnb.com/view/article/23111>, accessed 30 Sept. 2015].

oxforddnb.com/view/article/26002, accessed 30 Sept. 2015].

Szecsényi, Endre. "Freedom and Sentiments: Wit and Humour in the Augustan age," *Hungarian Journal of English and American Studies (HJEAS)*, Vol. 13, No. 1/2, The Long Eighteenth Century (Spring-Fall, 2007), pp. 79-92.

Tucker, Susie I. *Enthusiasm: A Study in Semantic Change* (Cambridge, 1972).

Wolf, Richard B., "The Publication of Shaftesbury's *Letter concerning Enthusiasm*," *Studies in Bibliography*, Vol. 32 (1979), pp. 236-241.

Voitle, Robert. *The third Earl of Shaftesbury, 1671-1713* (Baton Rouge, 1984).

・二次文献（邦訳）

ウァーモールド、ジェニー（編）『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 第7巻 17世紀 1603年-1688年』（慶應義塾大学出版会、2015年）。

ウェルギリウス（著）、小川正弘（訳）『牧歌 農耕詩』（京都大学学術出版会、2004年）。

エックルト、ヴォルフガング（著）、今井道夫、石渡隆司（監訳）『医学の歴史』（東信堂、2014年）。

カヴァリエ、ジャン（著）、二宮フサ（訳）『フランス・プロテスタントの反乱』（岩波書店、2012年）。

カッシーラー、エルンスト（著）、三井礼子（訳）『英国のプラトン・ルネッサンス——ケンブリッジ学派の思想潮流』（工作舎、1993年）。

カッシーラー、エルンスト（著）、佐藤三夫、根占猷一、加藤守通、伊藤博明、伊藤和行、富松保文（訳）『シンボルとスキエンティア——近代ヨーロッパの科学と哲学』（ありな書房、1995年）、207-214頁。

コリー、リンダ（著）、川北稔（監訳）『イギリス国民の誕生』（名古屋大学出版会、2000年）。

スウィフト、ジョナサン（著）、中野好之、海保真夫（訳）『スウィフト政治・宗教論集』（法政大学出版局、1989年）。

テレンティウス（著）、谷栄一郎（訳）『宦官』、『ローマ喜劇集5』（京都大学学術出版会、2002年）。

ヒル、クリストファー（著）、小野功生、圓月勝博（訳）『十七世紀イギリスの急進主義と文学』（法政大学出版局、1997年）。

ペール、ピエール（著）、野沢協（訳）『ピエール・ペール著作集 第2巻 寛容論集』（法政大学出版局、1979年）。

ポーコック、J. G. A.（著）、安藤裕介ほか（訳）『鳥々の発見——「新しいブリテン史」と政治思想』（名古屋大学出版会、2013年）。

マルゴッタ、ロベルト（著）、岩本淳（訳）『図説 医学の歴史』（講談社、1972年）。

ムール、サミュエル（著）、佐野泰雄（訳）『危機のユグノー：17世紀フランスのプロテスタント』（教文館、1990年）。

ミルトン、ジョン（著）、平井正穂（訳）『失樂園』（岩波書店、2005年）。

パスカル、ブレーズ（著）、田辺保（訳）『パンセ』（教文館、2013年）。

プラトン（著）、藤沢令夫（訳）『メノン』（岩波書店、2011年）。

ヘシオドス（著）、中務哲郎（訳）『ヘシオドス 全作品』（京都大学学術出版会、2013年）。

ホメロス（著）、松平千秋（訳）『イリアス（上）』（岩波書店、2009年）。

ホラティウス（著）、鈴木一郎（訳）『ホラティウス全集』（玉川大学出版部、2001年）。

ポリュアイノス（著）、戸部順一（訳）『戦術書』（国文社、1999年）。

・二次文献（邦語）

青柳かおり『イングランド国教会——包括と寛容の時代』（彩流社、2008年）。

今井宏（編）『世界歴史体系 イギリス史2——近世』（山川出版社、1990年）。

川喜田愛郎『近代医学の史的基盤 上』（岩波書店、1998年）。

川島重成、茅野友子、古澤ゆう子（編）『パストラル——牧歌の源流と展開』（ピナケス出版、2013年）。

木崎喜代治『信仰の運命——フランス・プロテスタントの歴史』（岩波書店、1997年）。

近藤和彦（編）『長い18世紀のイギリス その政治社会』（山川出版社、2002年）。

近藤和彦（編）『イギリス史研究入門』（山川出版社、2010年）。

柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦（編）『世界歴史体系 フランス史2——16世紀-19世紀なかば』（山川出版社、2011年）。

甚野尚志、踊共二（編）『中近世ヨーロッパの宗教と政治——キリスト教世界の統一性と多元性』（ミネルヴァ書房、2014年）。

鈴木善三『イギリス風刺文学の系譜』（研究社、1996年）。

須永隆『プロテスタント亡命難民の経済史』（昭和堂、2010年）。

浜林正夫『イギリス名誉革命史（上）』（未来社、1981年）。

浜林正夫『イギリス名誉革命史（下）』（未来社、1983年）。

蛭川久康、櫻庭信之、定松正、松村昌家、Paul Snowden（編著）『ロンドン事典』（大修館書店、2002年）。

深沢克己、高山博（編）『信仰と他者——寛容と不寛容のヨーロッパ社会宗教史』（東京大学出版会、2006年）。

森田安一（編）『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』（教文館、2009年）。

歴史学研究会（編）『世界史史料5——ヨーロッパ世界の成立と膨張』（岩波書店、2007年）。

歴史学研究会（編）『世界史史料6——ヨーロッパ近代社会の形成から帝国主義へ』（岩波書店、2007年）。